

彼岸会

彼岸の中目

毎日暑い〜と言っている間に何時しか秋がしのびよって、コオロギの鳴く音のこ
とさら耳に入る頃になりました。

「暑い、寒いも彼岸まで」、弱い病人も、老人も、兎に角彼岸まで漕ぎつけたらホッ
と一息します。その秋彼岸が私たちの前に待っています。

暦を開いて見ると、九月二十日の下にひがんと入れてあり、二十三日の下には「秋
季皇霊祭」と見えます。この日が、いわゆる彼岸の中目で、一年中で昼と夜とが等分
になる時であります。冬至になつて、昼が一番短かく、夏至になつて昼が一番長い、
その夏至から冬至へ、冬至から夏至へ、冬至から夏至へ、冬至から夏至へ、冬至から夏至へ、
その夏至から冬至へ、冬至から夏至へ、冬至から夏至へ、冬至から夏至へ、冬至から夏至へ、
して七日間を彼岸と言います。

「日本の暦にだけ、彼岸という文字がある。」

これを思う時、色々なことを考えずにはいられません。

畏くも宮中におかせられては、宮城内、皇霊殿において、歴代天皇の御霊を、奉祭
し、陛下皇霊察を親祭遊ばして、大孝をのべたものであります。

如何に平素は仏法など求めない人でも、この日は仕事を休みます。どのお寺でもお
日中だけは参詣が多い。仏教から来た「彼岸」が、何時しかに日本の国全体のもの
になりました。直接間接に、如何に、仏教が国民生活の中に織り込まれて、大きい感化
を与えているかを思わずにはいられませぬ。

彼岸の意義

彼岸、彼岸の岸とは何のことであるか。彼岸とは此岸に対する言葉であります。

彼岸……………涅槃界……………浄土

此岸……………生死界……………娑婆

生死界は我等の現実界であり、涅槃界は、我等の理想の究竟界である。

生死の此岸に立てば、涅槃の彼岸がはつきりわかり、理想の彼岸がはつきりすれ
ば、生死の此の世がはつきり見える。しかし、此の岸と彼岸との間には逆巻く怒涛
のような煩惱生死の海が見える。この生死の海を度つて彼岸に至る。

度つてゆくには船がいる、道がある。如何なる道をゆくのであるか。六波羅蜜がそ
れであります。六波羅蜜の道、それが我等の上に具体的に成就したのが念仏道であり
ます。波羅蜜、それを訳せば到彼岸、略して彼岸と言ふのであります。

我等は生死の迷妄を超えて、大涅槃の絶対的風光に一致しなければならぬ。南無
阿弥陀とは「真如一実の功德宝海」大涅槃、真如の妙理を円具せる如来の全威神力が、
人生に活現して、真人生の全体となり、迷妄の衆生のあらゆる疑情を断じつくして、
彼岸へと運ぶ。彼岸へ到らしむるのである。

この彼岸への往相生活において何処に人生の真実生活があるう。

我等は特に、秋の彼岸を迎えるにあたって、静かに如来の本願力を憶念するもので
あります。

彼岸会の起源

この仏教の眼目たる到彼岸の教えが、何時しかに、昼夜半々、不寒不熱の秋分春分の前後七日間を彼岸と称し、彼岸会を営むに至ったことは、我が国独特の国民生活であつて、誠にこの良風美習をして、真に内容を充実せしめなければなりません。

古え、比叡山では、彼岸会に二十一ヶ所の談義所を設け、遠近の道俗を集めて法談を聞かしたので、この日は一般に忘るべからざる日となつた。これがために曆家は衆人の便宜のために曆の上に記入することとなつた。これが源となつて、明治六年、太陽曆を用う日に至つても、三月と九月には必ず彼岸を記入されるようになったのととであります。

もつと遡つて何時から始まつたのであるかと求めても詳らかではありません。史家によつてそれぞれ意見を異にします。先ず最古は、

一、人皇第三十代、敏達天皇の時、聖徳太子が天皇に一年の内に二季の彼岸あることを奏し給ひ、時正会がおこつたのが、日本に於ける彼岸会の行事の始まつた最初だとする説、即ち遠く聖徳太子におこるとする説であります。

二、第二説は、人皇第四十五代、聖武天皇は光明皇后と共に仏教に帰依し給ひ、仏教伝布の上にお骨折り遊ばした方であるが、天皇が僧六百人を集め、宮中に於いて、大般若経を転読せしめられたことが、彼岸会の初めだと言ひ、

三、つぎは、第五十代、桓武天皇が、諸国に詔を草して、春秋二季七日間、金剛般若経を転読せしめられたに始まるというのであります。

以上三説あるのであります。だが、どれが確かに、彼岸会の始めであるかわかりません。けれども、最も新らしい桓武天皇説をとつても、天皇の御即位が、今年より一千一百四十四年の古でありますから、一千一百年以上の前のことでもあります。もつて如何に、日本民俗と彼岸会の交渉が深遠であるかを知ることが出来ます。

春秋二季にした理由

次に、春秋二季の春分、秋分をとつたかという点、

一、不寒不熱の好時節であつて一番、精進するのに都会がいい時だからであります。

二、仏教は中道を教えるものである。そこで、董夜長短のない、春分、秋分が一番びつたりするといふ説であります。

三、第三は、浄土教が入つて来てからは、弥陀の浄土が西方にあつて、この春分、秋分の日没する所は極楽の東門に正しく当るといふ考えが、更に前二説の考えに拍車をかけたのであります。ですから古から民間では、大阪天王寺の西門には聖徳太子の御直筆の額があつて、そこに立てば極楽の東門の中心に当ると信じられ、彼岸の中日には、この天王寺西門に立つて日没を拝するために集る者が群をなしたと言われます。

善導大師の定善義の日観観積の中にも、

「冬と夏との雨時を取らず、唯春秋の二際を取る。その日正しく東より出でて、直ちに西に捜す。弥陀仏の国は日没の処に当る。」

と言われ、これからはじまつて平安朝時代には、源信和尚が盛んに念仏を勧められ、往生要集によつて、西方浄土を教えられ、春分秋分の日没の所は、極楽の東門に当るとせられたので、彼岸会はいよいよ盛んになったのであります。

彼岸会の意義

昔の人は、彼岸の日には兜率天の霊所台に神々が集つて下界の人々を裁き善悪を調べる日であるから、この間は悪いことをしてはならないと信じていたものだそうです。時々お同行でも地獄におちると、閻魔法王が「春秋二季の彼岸はなかつたか」と叱られるから、この日だけは寺に参つておかねば閻魔法王の前が通られないという者がいます。こんな考えは龍樹の作だと称する天正驗記や彼岸功德経などにのつていたそうであるが、これらは全く偽作で、とるに足らぬものであるとされていますが、民間には何時しかそうした考えが流行したので、この彼岸は人の裁かれる日とされました。それと同時に到彼岸の行業に精進すべきものとされたのであります。

そこで、三代目の覚如上人は、改邪抄の中で「二季の彼岸をもて念仏修行の時節と定むる謂なき事」という一項をあげ、その中に、

「この一念を他力より発得しぬる後は、生死の苦海をうしろになして、涅槃の彼岸にいたりぬる條勿論なり。この機の上は、他力の安心より催されて、仏恩報謝の起行作業はせらるべきによりて、行住坐臥を論ぜず、長時不退に到彼岸の謂あり、この上は、強ち中陽院の衆聖衆生の善悪を決断する到彼岸の時節を限りて、安心起行等の正業を励ますべきにあらざる歟。彼の中陽院の断悪修善の決断は、仏法疎遠の衆生を濟₃度せしめんがための集会なり。今の他力の行者においては跡を婆婆に遠ざかり、心を淨域に住ましむる上は、何によりてかこの決断に及ぶべきや。然るに二季の正時を限りすぎりて、その念仏往生の時分と定めて起行を励ます輩、祖師の御一流に背けり。いかでか当教の門葉と号せんや、知るべし。」

と教えていられます。

中陽院とは、仏教大辞典には、
「この天は、欲色二界の中間に位し、兜率天の例にあり。中に靈所台あり……中略……此の天の冥衆、彼岸会の時に相集りて各々の帳簿を談合し、八度之を校し、三度これを覆し、治定再治の印を押捺して、衆生の善悪の業を判決すという。」とあります。

そこで、この彼岸の日に當つてその善悪決断をおそれて、あわてて善行を修めようとする輩を試められたのであります。

念仏の行者は、「他力の安心より催されて、仏恩報謝の起行作業はせらるべきによりて、行住坐臥を論ぜず、長時不退に到彼岸の謂あり。」とは誠に真実に道に徹した者の当然の相であります。しかし又彼岸を定めて、その日に仏徳を讃嘆し、道に目覚めて生きる機縁とすることは意味深い営みである。しかしその日に限つて、罪の裁断を恐れて自力の修善にやつれるが如きは、如何にも不徹底な正法に疎遠な人の功利的な偽善的行為であります。

我等は、伝統一千年の彼岸会をなつかしむと共に、意義ある内容をそれに盛らねばならない。三宝に帰依し、仏徳を讃嘆して、生きることの喜びをはつきりさせて頂くべきであります。

彼岸は私どもにとって裁かれる日ではない。地上の約束である寒熱二苦をまぬかれたこの時、心ゆくまで如来によって生きる身の幸を感謝し、正法を求め、仏徳を讃嘆して生きる聖日であります。